


今 月 の 一 冊

元木更津市教育委員会教育長 西村 堯 選

「死んだふり」で生きのびる

－生き物たちの奇妙な戦略－

宮竹 貴久 著 ・ 岩波科学ライブラリー

ISBN978-4-00-029714-1

1,300 円 + 税

子どもの頃、友だちが、「熊に襲われたら死んだふりをすると助かるってよ」と話していたのを思い出した。しかし、その頃でも半信半疑で、本当かなあと、ずうっと思ってきた。

この子どもの頃の不確かな疑問、脳みその中に深く沈殿していた疑問が、本書によって俄然脚光をあびることとなった。(ちょっと大袈裟か！)

『死んだふり』で生きのびる」について、昆虫学者である著者が、科学的にメスを入れる。しかも、かなり情熱をこめて。

私は、この情熱にいたく感動した。

「学者という者は、本当にすごい。微細な違いについても、ネチネチとあきらめることなく、追求する。情熱と粘り強さに敬服する。」これが、読後の感想である。

まず、「死んだふり」の定義として、「外部刺激に対して一定の時間、動か

なくなる独特の不動のポーズをとる行動」と述べる。

さて、第 2 章以下に、著者が四半世紀の歳月をかけて取り組んできた昆虫の死んだふり研究についての概要が述べられる。まず、幼虫がサツマイモなどの茎や根っこを食べて成長するアリモドキゾウムシについて取り上げられる。「死んだふりの 5W1H」という小見出しがある。

(それまで)静止していた成虫をつつくと、100%が死んだふりをした。摂食中だった虫もほぼ 100%が死んだふりをした。ところが、歩いていた虫をつついてもオスでは約 7 割、メスでは約 5 割の成虫が、三度突いても死んだふりをしなかった。

(p.28)

この実験で直感的に気付いたことがある。それは、その後一貫して変わらない事実になるのだが、虫には活動モードと静止モードがあり、活動モード(歩いているときなど)にあるときは、そのまま走って逃げる。一方、静止モード(止まっている)にあるときには、そのまま死んだふりをする。

(p.29)

死んだふりをした虫の持続時間を測定すると、静止していた虫は、一旦死んだふりをすると、平均で 8 分程度死んだふりを続け、歩いていた虫は、せいぜい 4 分程度しか死んだふりができなかった。

(p.28)

という。

「夜も死んだふりをするのか」とか、「腹が減っては死にまねできぬ」とか、「死にまねもゆとりのうち」とか、「暑くてもできない」とか、興味深い小見出しが続く。

以下、第 3 章は、「死んだふりの損と得 一生と性のトレードオフ」、第 4

章は「利己的な餌 ー他者を犠牲にして自分が生きる術ー」、第 5 章は「体のなかで何が起きているのか」、第 6 章は「いつ目覚めるべきか？」と続く。

昆虫好きの皆さんには垂涎の見出しではないか。理科の先生方は、既に、お読みになったと思うが、教科に関係なく、その「学問的態度」には、深く啓発される。

「あとがき」の中で、著者から貴重な提言が飛び出してくる。

「選択と集中」が研究と教育のキーワードの一つになった。この考え方は研究の多様性を喪失させる。

＜中略＞

生物、そして生態系の多様性ととともに、研究の多様性も僕たちは保全しなくてはならない。

(p.131)

25 年ものあいだ死んだふりの研究を続けていると。実際に人間の行動や医療の発展につながるかもしれないというところまで死んだふりの研究は来た。最初はそんなことまではもちろん考えもせず、ただひたすら死んだふりを観察して、その行動の意味を考え続けた。なぜ飽きもせずに続けられたのか？それは僕が本当に面白がって死んだふりの研究に取り組んできたからだと思ってしまう。研究だけではないと思うが、人間のすべての取り組みはその根底に面白く感じる心が大切なのだと僕は思う。

(p.131)

一連の研究報告の後で述べられるこの言葉は、誠に、説得力がある。

死んだふりをしているあなた。目覚めて、ぜひ、ご一読を。